

令和6年度 第1回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会 議事概要

内 容	令和6年度 第1回伊丹市文化振興ビジョン策定懇話会
開催日時	令和6年5月13日(月) 10:00~12:00
開催場所	伊丹市役所 4階 403(鉛白)
出席委員	中協会長、岩崎委員、上田委員、衣川委員、吉田田委員
会 議 次 第	
<p><b>1 開会</b></p> <p>(1) 開会挨拶</p> <p>(2) 資料確認</p> <p><b>2 議題・意見交換</b></p> <p>(1) 伊丹市文化振興ビジョンの素案について</p> <p>(2) その他関連事項</p> <p><b>3 閉会</b></p>	
発 言 要 旨	
<p><b>【議題(1) 伊丹市文化振興ビジョンの素案について】</b></p> <p><b>中協会長：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで2回の懇話会でいただいた意見を元に、私と文化振興課でやりとりをして素案をまとめた。本日は第3章以降がメインの議題だが、気になる点があればご意見いただきたい。</li> </ul> <p><b>上田委員：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・9頁に「デジタル化の進展」があるが、このことで考えると、デジタルを使いこなすためのリテラシーの向上というのは必要だと思う。</li> </ul> <p><b>吉田田委員：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まずめちゃくちゃいいというのが大前提。</li> <li>・「10の基本方針」と「19の動詞」にまとめたことが素晴らしい。これによってすごく分かりやすくなっているし、後から見たときに考えやすいし、評価もしやすい。</li> <li>・何ができて何ができなかったかがはっきりする。</li> <li>・一番すごいのが「過程」の評価まで踏み込んだこと。「過程」のところを評価するための努力を全員でするって、今まで誰もやってこなかったのではないかな。</li> <li>・まずこれでやってみて、後で振り返ったときに、もっとこんなやり方ができるよねというようになっていくのかなと思う。</li> <li>・これが“行政からのお達し”みたいなものにならないようにしたい。行政職員も含めて市民が“自分ごと”の感覚で作ってるものになればいいなと思う。</li> <li>・その際のセンスとして、単にわかりやすければいいというものでもなくて、重要なことは全部言い尽くすべき。イラストも大事だが“語感”なんだろうなと思う。</li> <li>・真鶴町の美の基準がすごくいい。</li> </ul> <p><b>上田委員：</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今、事務局の方が声に出して読んでくださったように、動画や音声があってもいい。朗読でもいいと思う。</li> </ul>	

**吉田田委員：**

- ・最後の方の3分の1は行政文書でもいいと思う。僕の知らない使われ方もあると思うので、全部じゃなくていい。

**岩崎委員：**

- ・具体化して見える化をした方がいいということ。
- ・劇場法の前文を高校生に読ませるワークをしたことがある。参加者がそれぞれ自分の言葉に置き換えて発表するのが面白い。

**上田委員：**

- ・私も、大阪市の芸術文化振興条例をパフォーマンスとして朗読したことがある。

**衣川委員：**

- ・こういうものはよく分からない感じの作りになってしまうことが多い中、まず3つの文化芸術を示して、10の基本方針があって19の動詞があるという形で、分かりやすく見える化されているところが素晴らしいと思う。
- ・評価の部分は、これまで定性的にしか評価されなかったものについて、定量化しないと予算に結びつかないということは間違いないと思う。
- ・定量化する方法論を提示するというのはすごく大きいことで、革新的だと感じている。
- ・「文化振興」というと、言葉のイメージとして、“ベクトル”の方向が行政から市民やまちに対して向くという動きになりがちなのを、このビジョンでは、市民やまちの方から行政へ、あるいは市民やまちの中でベクトルがいっぱい行き交っていて、最終的な到達点が見えてないものも含めてたくさんあるっていう状態がすごくいい。
- ・「新しいものや未分化のものをそのまま受け入れる文化芸術」は、受け取られ方によっては、前衛的なものやコンテンポラリーなものをやれというようになるので、そうではなく、もう少し何かわかるように書かれた方がいいのかなと思う。
- ・年間の来館者数を出すことも大事だが、本来は「初めて来た人」や「初めて関わる人」をいかに増やしていくかということが大切なのではないかな。
- ・同じ人が何回も来ることで深まっていくということも大事だが、“より広がる”ということを考えたときには、「初めて来る人」という視点もどこかに入るといいと思う。

**中協会長：**

- ・アップデートや事業の見直しを踏まえると、3年に1回くらいはこのビジョンのようなプログラムをみんなで実施して、残り2年間はそれを検証し合えば面白い。
- ・本当は「ビジョン」と「事業」はセットで進めるべき。

**岩崎委員：**

- ・ビジョンができたときに市民がそれを知る必要がある。
- ・市民が自分で情報を取りにいかないと、インターネット上でも市民が目にすることはないのではないか。やはりそういう“知らせる”ための事業予算も必要ではないかなと思う。
- ・19の動詞はすごい。先進的だし、これが事業の指針になる。
- ・29頁の指標で「鑑賞したことがある人」が令和10年には69%。これは市民なのか、それとも劇場が動員した人数なのか。
- ・アイホールは市民利用が少ないが、実はあのキャパシティにしては結構広く他都市からの動員がある。

- ・市民のための指標だが「にぎわい」という点でいえば他都市からどれぐらいの人が来てくれているのかということも含んでいる。経済波及効果の観点からいうと市民だけのものではない。
- ・ものすごく大きなオペラやバレエといった公演では他都市の人が多くなるということは当然あるわけで、そういったことをどう評価するのかということは非常に難しい問題だと思う。

**事務局：**

- ・この2つの指標（鑑賞したことがある・活動を行ったことがある）は、文化施設の評価のためではなくて、市民の方が文化芸術にどう親しんだのかを測るための指標と考えている。

**中協会長：**

- ・上3つの指標（鑑賞したことがある・活動を行ったことがある・来館者数）は不動だと思っている。4つ目5つ目としてどのような指標がいいか考えたい。

**衣川委員：**

- ・行政で他分野との連携ってというのは比較的苦手というか、どちらかという得意ではないと思うので、あえてこうやって指標として示すことで担保になる。

**中協会長：**

- ・“対話”を測る指標が少ない。“出会い”とか“対話”の部分がちょっとまだ見えにくい。

**上田委員：**

- ・「市民主体」ということが割とうたわれている中で、ここだけが行政の指標になっている。「鑑賞した」や「活動を行った」の主体は市民だけれども。

**岩崎委員：**

- ・しかし行政計画の指標なのでそうなる。
- ・「連携した取組数」は令和10年で10件となっているが、10件以上展開できるのではないかな。

**中協会長：**

- ・現状でもおそらく30件はあるのではないかな。50件くらいの規模感だと思う。

**岩崎委員：**

- ・22頁、3つ目の「新しいものや未分化のものをそのまま受け入れる文化芸術」が最も大事だと思っている。
- ・その説明で「日常生活の延長にすぎなかったり、一見すると、意義がわかりにくい活動が含まれていたりする」というのは、とても具体的な文章だが、「わからない人」の目線に立って言い過ぎていないかという気もする。このままでいいと思うが。
- ・23頁「10. 市民のチャレンジに対して伴走支援を行い」の後ろの「時には」という表現は、「あまりやらない」と読めてしまう。「伴走支援を行い、ともに実行します」で成り立つのでは。

**中協会長：**

- ・「伴走支援を行います」で終わりがちだが、そうではなく、やる人が誰もいないなら自らやるという意味で「時には」と書いた。もっと積極的に「ともに」でいいということか。

**岩崎委員：**

- ・「時には」は留保する方向に働く気がする。より“迫力”を出すなら「行い、ともに実行」の方がいいのではないかな。

**衣川委員：**

- ・ビジョンや条例を作っても、市民は「誰も読んだことのない」ビジョンが山のようにあると思う。市民のみなさん“自分ごと”なんだよと、何らかの形で広める方法を考えた方がいい。

**上田委員：**

- ・「新しいものや未分化のものをそのまま受け入れる文化芸術」をどういう言葉に変えてみたらいいか考えている。例えば「表現」という言葉を入れて「未分化の表現としての文化芸術」とか、もう少し付け加えたとしたら「一人一人から生まれる」とか。少し長くなるが「一人一人から生まれる未分化の表現としての文化芸術」とか。
- ・22頁。説明し過ぎかなという意見があった部分、私は丁寧だと思った。それよりも「新しい文化芸術として受け入れます」というのは、なぜ受け入れられないといけないのかと思った。
- ・23頁。10の基本方針はとてもいい。4番目の「市民の創意工夫」という部分は、市民に工夫させているように見える。行政も関係機関も入れて「みんなの創意工夫」ではないのかと思う。
- ・25頁。複数の動詞が混ざるのが良いというのは本当にそう思う。注意書きで複数の「性質」が混ざるのが良いとしているが、複数の「動詞」が混ざるでいいのではないか。
- ・27頁の「(1) 市民」のところで「市民の中に“文化芸術の種”が根付き」の部分は、「花を咲かせて」の後に「また種をまく」まで行って欲しい。循環するという意味合いで。
- ・27頁の「(4) 関係機関等」は、後ろに出てくる指標の「他分野と連携した取組数」と合わせるのであれば「福祉」も入れておく方が一般的。
- ・30頁。「公演のために出演者が集まった練習の時間」という部分は、練習だけではなく打ち合わせや会議も含むと思うので「関係者」でもいいと思う。

**吉田田委員：**

- ・30頁の市民意識調査のアンケートの設問は誰がつくるのか。

**事務局：**

- ・文化芸術に関する市民意識調査を令和5年度に実施したので、次回も同様に文化芸術に関する市民意識調査を行うことを想定している。
- ・ただ、次の総合計画を作るタイミングでもあるため、政策部門で実施する調査に巻き込む可能性もある。アンケートの設問は市が作ったもので行うことを考えている。

**吉田田委員：**

- ・この市民意識調査の中身が実はすごく影響力があるのではないか。僕らが作ったこのビジョンの評価の中で重要なポジションを占めるのでアンケートの設問が大事だと思う。

**事務局：**

- ・市民意識調査で行うアンケートの設問は、基本的に経年で比較できることを意識しているが、その中で新たな設問を作ることは可能だと考えている。

**上田委員：**

- ・31頁。「対話時間」を評価するのは素晴らしいが、働き方改革が声高に言われている中、対話のための時間を取りたいけど早く帰らなくてはならないというようなことで、実際には難しくなったりしないか、大丈夫なのかなと思った。
- ・いろんな仕事場で、みんなで話し合いたいけれども働き方改革によってコミュニケーションの時間が減ったという話をよく聞く。

**中協会長：**

- ・今まで“シャドウ・ワーク”になってることにスポットライトを当てますという話なので、対話の時間を稼ぐために残って参加しろというわけではない。
- ・「鳴く虫と郷町」の担当者にヒアリングしたが、ぜひ採用してほしいという声を聞いている。

**岩崎委員：**

- ・ビジョンがこれから何年かずっと続く中で、若者たちはそういうコミュニケーションを嫌がるようになってきているから、こういうものを残しておいた方がいいという考え方もある。

**衣川委員：**

- ・フレンテホールはこの形で人件費がカウントされている部分がある。指定管理の枠から外れる部分だが、それを1年間やってみて“対話”の時間以外の時間も生じていることがわかった。
- ・全体的には確かにこういう項目が入ることが大事だと思うが、実際は、対話するための準備があって、対話後も業務として生じているものがある。

**岩崎委員：**

- ・いたみホールにある財団事務所は行きにくい。これが効力を持ったときにはどこかに相談窓口をつくることの後押しにはなる。

**中脇会長：**

- ・基本理念のコピーについて、上田委員が14の案を出してくれた。

**上田委員：**

- ・2文になっているので、前の部分と後ろの部分を組み替えるなど考えていただいて大丈夫。
- ・「対話」のことや「市民主体」であることを意識してつくった。

**衣川委員：**

- ・「文化芸術がなかにある」というキーワードは、それぞれの中で生きているというイメージだと考えれば「息づく」という言葉があってもいいと思う。

**中脇会長：**

- ・僕個人は「なにかが起こる、わたしのまち」は、何か予感めいたことや僕らがずっと言ってきたことが反映されていて、すごくワクワクする。

**岩崎委員：**

- ・センセーショナルでいいと思う。「なにかが起こる」は。

**吉田田委員：**

- ・「なにかが起こる」はめちゃくちゃいいと思う。

**上田委員：**

- ・「なにかが起こる」の前には「出会い」もあるし「文化芸術」もあって、その上で「なにか」が起こる。

**中脇会長：**

- ・基本理念としては1番（出会いと対話と文化芸術と、なにかが起こる、わたしたちのまち）をここに置いてみましょう。「わたしたちのまち」を採用するかどうかは事務局で一度検討を。
- ・本日いただいた意見を踏まえて私と文化振興課でさらに揉んで、みなさんには適宜こんな感じでどうかなというように投げかけさせていただく。

以上